



●日本色彩学会会員の著書一覧の作成

日本色彩学会は、1948年設立の「日本色彩科学協会」を前身とし、1970年に「日本色彩学会」と改称し、2015年4月に一般社団法人になりました。前身から数えると70年以上の長い歴史を有する学会です。

その間に、色彩学の研究者や、色彩応用の分野で活躍される会員が多く参加され、多くの文献や著書を残され、すでに他界されたり引退された方々も多数いらっしゃいます。

一方、色彩教材研究会に参加されている学会員は、色彩教育に軸足を置いた活動をされ、色彩教育に使う、理論や材料を日々探求されているはずです。

色彩学会の先達や現役の研究者や実務経験者が執筆された著書は、貴重なる内容を持つ宝を秘めているものが数多くあると考えられます。それらの宝を、一覧表の形にして学会員が容易に検索できるシステムを構築できれば、色彩教育活動の力強いツールになる可能性があります。

そのリスト作りを、色彩教材研究会が始めました。著書をお持ちの方は、事務局か研究会か、わたしにご一報ください。なお著書の一覧表は日本色彩学会のホームページから使えるようにしたいと思っています。(永田泰弘)

言葉凸凹 真朱と銀朱

真朱(しんしゅ)と銀朱(ぎんしゅ)は、古墳時代から日本でも使われていた赤色顔料の名称である。化学的な表現を用いると、両者ともに「硫化水銀」である。化学記号だとHgS。昭和時代に水銀中毒事件などが起こり、毒物として塗料などへの使用は禁止されている。

その赤色は、極めて鮮やかで、古墳内の装飾や、神社仏閣の朱色の塗装、絵画の絵の具、印肉などに使われてきた。

真朱と銀朱の名称の差は、真朱は古代中国の辰州で産出した朱色の砂であり、辰砂とか朱砂と呼ばれる天然産の朱色の砂や鉱石をさらに細かく砕いた赤色顔料である。

一方、銀朱は、水銀鉱山から掘り出した水銀に硫黄を化学反応させて造った人工の赤色顔料である。

銀朱は、日本でも古代より各地で生産され、中国大陸にも輸出されていた。

「丹を生む」と書く丹生郡(にうぐん)や丹生川などの地名は、銀朱の生産に関わった土地である。

銀朱よりも真朱の方が、色材においても尊ばれたと伝えられている。真朱には、本朱、真赭(まそお)の呼名もある。(永田泰弘)

●大辞泉ひろいよみ 58 一き

金襖：きんぶすま。地紙全体に金箔をおいた襖。金襖物の略。

銀襖：ぎんぶすま。地紙全体に銀箔をおいた襖。

金縁：きんぶち。金製、または金色の縁。

銀縁：ぎんぶち。銀製、または銀色の縁。

金粉：金の粉末。また、金色の粉末。蒔絵などに用いる。

銀粉：銀の粉末。また、銀色の粉末。蒔絵などに用いる。

金碧：きんぺき。金色と青緑色。

金星：きんぼし。相撲で平幕の力士が横綱を倒したときの勝ち星。転じて大きな手柄。

銀幕：映写幕。スクリーン。転じて、映画。また、映画界。

金脈：きんみやく。金の鉱脈、資金など、金銭を引き出せる所。

金無垢：きんむく。純金。

金目：きんめ。江戸時代の金貨の単位の名目。両・歩・朱など。

銀目：ぎんめ。江戸時代の銀貨の単位の名目。貫・匁・分・厘など。

金紋：きんもん。金箔・金漆で描いた家紋。江戸時代、大名が家格により挟み箱のふたに描くのを許された。(永田泰弘)